# 統 合 医 学

札幌市医師会
アンデルセン診療所　門脇　純一

統合という言葉は、最近の経済界でよくみられる。医療の世界でも出現してきた。国立大学、国立病院をはじめとして薬業界にもこの動きが現れ気になりだした。いずれにせよこの動きは、経済が基盤にあり生活前線を変貌させているのであろう。

統合とは辞書をひくと、2つ以上のものを合併して一つにまとめるとある。

さて統合医学というのは、どんなもののことをいうのだろうか？　ふと疑問を持ち始めた。

総合医学と、どんな違いがあるのだろうかなど、単純な疑問も付随して出てきた。後者のほうが前者よりひと枠、大きそうな響きがあるくらいの素人の区別しか私にはできない。

かつてのわれわれが受けた教育；西洋医学が実地医学を経験してオールマイティーでないことは誰しもが感ずることである。医療は身体だけではなく、精神・心理的の重要な側面を有している。このことを、ここ20～30年の間に強く教えてくれた。この欠けがちな医療領域を充足していくことは、内容をさらに充実したものに進展させるに違いない。

統合医学は私にとっては、聞きなれない言葉であったが、欧米では耳新しいものではない。すくなくともIntegrative Medicineなる名称はすでに日常語になっているという（帯津良一Medical ASAHI　63，10月号　2003）。

この名の医学雑誌が5年前にアメリカから創刊された。副題にIntegrating Conventional and Alternative Medicineとなっている。イギリスではAlternativeの持つ挑戦的な雰囲気を嫌って1990年代に入ってComplementaryという言葉を用いるようになったという。

つまり、統合医学とは通常医学（西洋医学）と代替療法との統合である。帯津氏の説明の西洋医学以外の療法が全てAlternative Medicineだとすると、前段の私の総合医学と統合医学との違いの印象は怪しくなってくる。アメリカでは既に、1億ドル以上の予算が統合医学に組み込まれ、報告書が出されているという（NHK TV　3月）。

統合医学の代替療法の精神性（Mind）と霊性（Spirit）のうち、後者は個人的には最も不勉強な領域である。代替療法といえば、最近特に注目されているのは、健康食品と称するものである。毎日の新聞紙上を賑わしている。代替療法の効果の評価は治した、治さなかったではなく、わずかでも向上させたら効果ありとするのは、従来の評価法と同じようには受容されない。生活上の質的評価は重要であるが、評価は難しい。科学的エビデンスに基づく、謙虚な評価でありたい。統合はIntegrate：積分することなので、点、線の次元を越えたもので、より優れた生活、生命場のエネルギーを高める原動力なのであろうから。

# 岩国と錦帯橋と槍倒しの松

札幌市医師会
札幌北クリニック　大平　整爾

両親が広島県の出身であり、広島市やその近傍を訪れる機会を窺ってきたのだが、なかなかそのチャンスに恵まれなかった。2002年にようやくその機会が訪れ、私なりのルーツ探訪を楽しみ感慨を味わったのだった。広島といえば宮島で、ここにも足を延ばし、ついでにと口実を設けて岩国にも赴き錦帯橋を拝観している。岩国（山口県）が広島県の南端にぴったりと接していることを知ったのも、恥を晒すとこの時であった。2004年3月下旬に岩国市に所用ができて、再び錦帯橋にまみえる機会を得たのだが、前に錦帯橋を訪れた時は橋の架け替え直前であり、何やら周辺が慌ただしい雰囲気に包まれていた。今度は静かにゆったりと橋を渡り、架け替え後の錦帯橋の美景を楽しめることを期待したのだった。3月下旬の岩国、折しも錦川両岸の桜並木が満開直前で新装なった錦帯橋に文字どおり花を添えている。

初代の錦帯橋は岩国藩3代藩主が帰化僧の助言を得て計画され、1673年に完成したが、その8カ月後には大洪水で流されてしまったという。

その後5カ月を費やして再建された二代目の橋は実に276年間もの長い年月風雨に耐え抜いたのだが、1950年9月の台風で残念ながら流されてしまった。この橋は既にこの周辺の人々の生活の利便性を超えて岩国を象徴する風物の一つになっていたのであろう、そのままの形で再々度の架け替えが1953年に完成した。土地の人々が呼ぶ「昭和の再建」以来半世紀ぶりに老朽化が進んだ橋の全面架け替えが平成13年（2001）11月から始まり、私がこの地を再訪した平成16年（2004）3月下旬のほんの数日前に完成したのだと同行してくれた友人が自慢げに教えてくれた。総工費26億円という巨費で、その半分の13億円がマツ・ヒノキ・ケヤキ・ヒバ・クリ・カシなど国産の材木代であったと聞かされた。

緑豊かなこの日本だが、橋の材料になるような良質の巨木は年々減ってきており、材料の調達がまず、苦労の種であったことであろう。土地の人々が自慢するだけのことはあり、緩やかな美しい曲線を見せてアーチ形に連なる五橋はほのかに木の香りを漂わせながら、周辺に美しく咲き誇る桜の花々を従えて山水の美の要をなしている。真新しい美しい木目を見せている橋板を土足で渡るのは、つい躊躇してしまうほどだ。右前方彼方の小山に雄姿を見せる岩国城を見やりながら、錦帯橋をゆっくりと渡った。

南国だが3月は下旬の夕刻であり、肌を過ぎる風はまだ少しく冷たい。橋を渡りきると、左手の橋のたもとにいわくありげな松ノ木が目に留まった。案内板には「槍倒しの松」とある。倒しには「こかし」と仮名が振ってあった。昔々、諸国の大名が他藩の城下を通過するときに、行列の先頭を行く槍を倒すのが儀礼であったそうな。ところが岩国藩は6万石の小藩であったためであろう、南国の大藩の行列は威風堂々槍を立てたまま通ったらしい。岩国藩6万石の武士はこれを見て憤慨し、かなり成長した横枝の張った松ノ木を橋の頭に植えて、大藩といえども橋を渡る際には槍を倒さなければ通れないように細工して、溜飲を下げたのだろう。岩国武士の負けず嫌いと意地を象徴するものと言い伝えられている。思わずニヤリとしてしまう封建時代の逸話と、記憶に留まった。

初代の松は1944年頃に発生した松食い虫に侵されて、手当ての空しく1953年に樹齢およそ300年で枯れてしまった。現在、橋畔に植えられている槍倒しの松は三代目で、初代の松から自生した直系の松が1968年2月に吉香公園から植え替えられ、往時を偲ばせながら枝ぶりを誇っている。木の香りを周囲に漂わせ辺りの風景に溶け込んでいる美しい錦帯橋にも、生くさい世俗の波が押し寄せていたことになる。見事な匠の技を披瀝する一見に値する錦帯橋であった。

# 「南木佳士」

深川医師会
児島医院　児島　俊一

南木佳士（なぎけいし）のペンネームで、８月号の文学界に「山と海」を書いている霜田哲夫君は、私の大学の１年後輩である。

私が教養の２年目、彼が１年目の１年間、秋田の下宿で一緒に過ごした。かなり前のことでもあり、思い違いがあってもいけないので、その当時の彼のエピソード的なことも書けない。

ざっとこれまでの彼の作品を振り返ってみたい。彼の全作品を読んでいる訳でもないし、作品の評論的なことを書く力もない。今思い出す作品（単行本あるいは文庫本になった作品）を羅列して御紹介したい。

「破水」で文学界新人賞だったと思う。この作品ではじめて、彼が小説を書き続けていることを知ったのだが、これ以前の作品もこの作品も読んだのかどうかの記憶がはっきりしない。

「ダイヤモンドダスト」(文春文庫）で平成元年春の芥川賞を受賞。「落葉小僧」(文春文庫）は、受賞後第１作目で肩の力みが抜けたのか読みやすい小説だったと記憶している。

他に文春文庫で出版されており、手に入りやすいものと言えば、「エチオピアからの手紙」「医学生」「冬物語」「阿弥陀堂だより」「山中静夫氏の尊厳死」「家族」の小説集がある。

随筆集としては、「ふいに吹く風」「ふつうの医者たち」がある。

これらの作品の中では、「阿弥陀堂だより」が一番良いと思った。一昨年映画化されたが、残念ながらあまりヒットはしなかったようである。朝日メディカル６月号によれば、ビデオになっており手に入れることができるようである。

変わったところでは、岩波新書に佐久総合病院の若槻俊一先生のことを書いた「信州に上医あり」との本がある。

文庫本にはならず単行本だけのものでは、文芸春秋社から「海へ」「神かくし」「急な青空」。朝日新聞社から「臆病な医者」。岩波書店から「八十八歳の秋ー若槻俊一の語る老いと青春」「冬の水練」「天地有情」がある。

こうして書いてみて驚いたが、単行本、文庫本両方出ているのもあり、随分せっせと本を出したものである。

書く前に予想した通り書名のただの羅列で、私の本棚の整理に役立っただけで終りそうである。皆様の参考になりそうもないが、それでも一冊でも御購読いただければと思っている。

表紙写真

## 最北の名山「利尻山」

札幌市医師会　田中　信義

標高1,721mの利尻山は日本名山百選の最北限で、別名「利尻富士」とも呼ばれている。礼文島と共に最果ての浮き島「利尻島」そのものである。

７月中旬、礼文島の香深港から稚内へ向かうフェリー上で、霞の奥からやおら顔をのぞかせた波間の秀峰に、海鳥と仲良くしばし名残をおしんだ。